

平成 20 年度「生活文化演習 I」授業研究の報告

上 憲治・鳥居 英男・今井昭正

帝京短期大学

Report of class method of「life culture maneuver 1」in 2008 fiscal year

Kenji kami・hideo torii・akimasa imai

Teikyo Junior College

【目次】

はじめに

1. トピックス・レポートと報告

- (1) トピックス・レポート形式
- (2) トピックス発表を聞いての報告

2. 企業研修

3. 企業研究

4. インターンシップ

5. 評価と改善

はじめに

生活文化演習は生活文化コースで設けられている演習である。1、2年ともに必修とされ、1コマ45分、通年1単位の科目である。1年には生活文化演習Ⅰ、2年には生活文化演習Ⅱが設けられている。

本レポートは1年の科目で、生活文化演習Ⅰについてのものである。

生活文化演習Ⅰは社会人基礎力を養成することを教育目標とし、実践的にはインターンシップを経験することが目的となっている。この演習のカリキュラムはそれを目指して計画されている。現在の取り組みとしては、まず、

1. トピックス：社会的情報に目を開くところにある。社会情報を捉え、レポートして報告・発表する能力を身につけることを課題としている。
2. マナー指導：次に敬語等の基本的マナーを自覚して身につけることが課題とされる。
3. 企業研修：前期のまとめと後期の導入を期して企業での研修を実施する。2時間ほどの予定で企業の空気に入って、体験する活動である。
4. 企業研究：さらに企業についての学習が課題とされ、企業研究がおこなわれる。

図 1. 平成 20 年度 生活文化演習 1 年次スケジュール

外部研修	月	授業内容
	4	レポートトピックス
	5	↓
	6	↓
	7	↓
第1回企業研修	9	平成20年度は「(株)ホテル日航東京」
	10	レポート「トピックス」、レポート「会社研究」
	11	↓
	12	インターンシップ研修2回
第2回企業研修	1	平成20年度は「(株)キリンビール」
インターンシップ(2週間)	2	
	3	

5. インターンシップ：インターンシップは1年の春休みに実施されるが、派遣前にはインターンシップ演習を実施する。この演習の一環であるが、別途この演習の時間意外に設定している。内容はロールプレイング等による企業訪問などの疑似職場体験をおこなう。
6. 評価について：本コースでの毎年の取り組みは、評価し、改善策を示して完結する。
以上のようなことが展開されるが、図1はその年間スケジュールであるが、順次その内容について述べる。

1. トピックス・レポートと報告

(1) トピックス・レポート形式

学生が社会情報に関心を持ち、現状社会を理解しておくことは重要である。今日では情報が氾濫しているといわれるが、学生はマスメディアに疎い。本演習ではこうした学生の不足を補うために毎回下記ののような形式でトピックス・レポートを提出する。

図 2

学籍No.	氏名	平成18年度 第3回	表面
トピックステーマ			
有害サイト(子どもに見せない)			
資料名 読売新聞 5/17 朝刊			
【事実の記述】			
現在ではほとんどの子どもも携帯電話を持っている。携帯電話からはいろんなサイトにアクセスし様々な活用できる。そうした中には子どもにはふさわしくないサイトもある。			
現状ではそうしたサイトの利用は野放しで、子どもにも悪影響をあたえている。			
一方マスメディアはテレビを始め、子どもには見たくない番組や週刊誌などの記事も野放しである。			
そうしたサイトや記事が子どもに触れないように、携帯にフィルター機能を持たせたり週刊誌などを目に触れないようにする方法がある。			
【意見の記述】			
私は子どもにはふさわしくない情報は子どもからシャットアウトすべきではないかと思う。しかし現実にはほとんど不可能なほど社会的にそうした工夫や対策がなされていないのである。			
【意義や反対意見とその理由】			
その原因は情報に対する現代日本の考え方にある。現代日本では自由主義の観点からこれらの情報を規制することは基本的に難しい。そこでは問題は二つ出現する。一つは子どもへの情報規制をすることの是非であり、もう一つは、もし規制するとしたらどのように規制するかという問題である。			
先ず最初の問題は、子どもにとって有害であるとするのは、報道や情報活動の自由に関連する問題である。この問題の溝は深い。日本は戦争経験の中で情報規制についてきわめて過敏である。そこで戦争時のような国家や為政機関による管理や強制につながらないかと懸念されるのである。			
私はこの点を十分に配慮して子どもへの有害情報を見定めることは重要なことだと思う。			
次にその対象であるが、記事ではそうした有害情報の一例を示しているが、これも安易に国家や為政機関が規制することは出来ないという考えが基本的である。しかし家庭や保護者の識見を高め、子どもへの情報提供に真摯に取り組むようなボランティア精神によって対策がとれるだろうと思う。			
【総論】			
この問題をどのように考えたらよいかはこれから家庭を持ったり、これからの情報社会で生きるために自分のスタンスとして整えておきたいところである。			

図3



後期ではこのトピックスを発展的に展開し、トピックスやそのほかの時事問題の中から特筆したテーマでディベートを行っている。ディベートは時事問題を深く考えることに役立つ。また自分とは異なる主張を理解し、違った立場を尊重できるようになることに役立つ。

(2) トピックス発表を聞いての報告

トピックス・レポートは毎回数人の学生が発表する。その選定は教員側で決める。狙いは発表力をつけさせるところにある。

また発表の間は、学生たちは全員発表内容を規定の用紙に記録したり講評を書いたりするように義務付けられている。その形式は以下のようである。

その狙いは、聞く力や記録する力、また評価する力を身につけることにある。

効果としては、授業は静かになり、発表をよく聞くようになったことが顕著である。また提出レポートも充実した内容になっている。

図4

クラス・学籍No.	氏名	発表の要点と意見	評価
発表者氏名			
発表者氏名			
発表者氏名			

3. 企業研修

企業研修とはコースの学生全員で特定の企業を訪問し、企業内を実際に見聞し、企業説明や社員の心得などの講義を受けることである。次Pの写真1はその一場面である。学生にとっては、企業体験はまれであり、やがて社会人となる時期にあるので新鮮で意義深いものとなっている。企業研修後に提出されるレポートではそうした報告が圧倒的に多い。

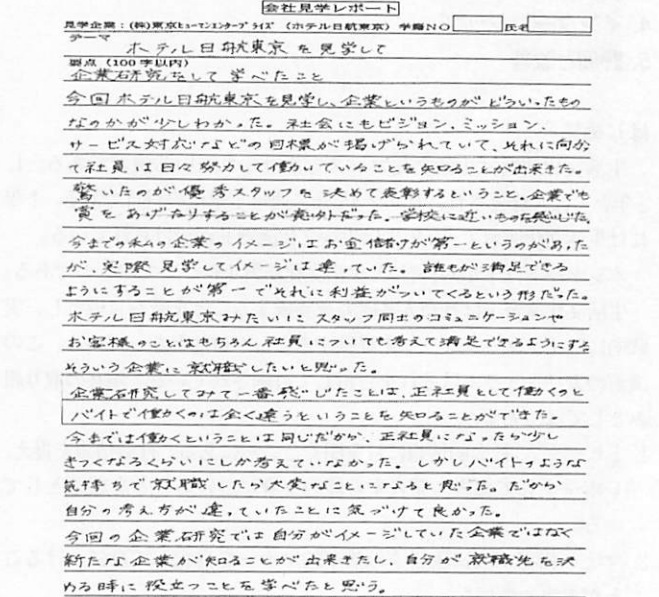
企業研修に行くに当たっては服装やマナーが厳しく指導される。指導に沿わない学生はインターンシップ派遣対象外の可能性が高いことを学生に充分周知させている。

次は学生のレポート事例である。

マナー教育は先ず(1)敬語について学習し、(2)次はインターンシップ演習において企業訪問や職場体験をロールプレイングし、立ち居振る舞いについて演じる。

(1)と(2)はそれぞれ手作りテキストが用意されている。

図5



4. 企業研究

後期から始まる新しいメニューは企業研究である。このメニューは①企業に目を向け ②調べる企業を選定し ③その調べ方を学習し ④レポートに記述して発表する、という流れからなる。企業研究は1年の春休みごろから始まる就職活動に有効である。(図6は事例レポート)

①によって企業を調べる方法を知り、どんな企業があるのかという導入から入る。

次に②は自分の興味や関心と照合することで、自分にとっての企業を認識する。この段階ではまだ自己本位で社会や企業を見る視点に止まっている。いわゆるこれまでの経験範囲からしか企業を選定できない状況である。

③では企業情報を得る色々な媒体を獲得し、企業についての基本的情報(株式や従業員数、企業理念、職種・給料・待遇)を始め、その他の特色を見ることを修得することが期待されている。

④では調査データや情報をレポート報告することを訓練し、まとめる力や発表する力、聞く力などのいわゆる社会人基礎力を身につける。

